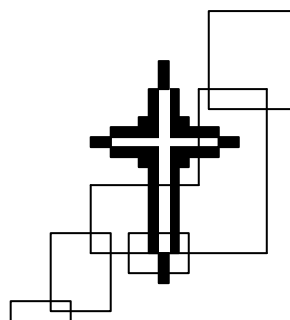


日本のための とりなし



わが国のために祈りましょう
ニュースレター12月号
2003年12月7日発行

日本のためのとりなしの会
事務局：〒228-0802
相模原市上鶴間6-1-17 皆川方
TEL042-747-5703
FAX042-746-2119
<http://www.Christ-ch.or.jp/>
*振替：00270-7-6421

委員長：皆川 尚一(神奈川県)
委員：友納 徳治(福岡県)
手束 正昭(兵庫県)
林田 金弥(神奈川県)
釘宮 義人(大分県)

協力委員：
町田 誠(千葉県)
中原 耕平(千葉県)

日本宣教論序説(第9回)

日本に伝来したキリスト教

〔第6波〕欧米キリスト教の渡来

(1945年～2000年)

ヨハネ皆川尚一

4. キリスト教諸派の再編成

前述の通り、大東亜戦争において国家の戦争目的に協力した日本のキリスト教会は戦争の終了によって自らの歩みを悔い改めて再出発しなければなりません。国家的に見れば、八紘一宇・大東亜新秩序の建設を旗印として掲げた日本の戦争は偽りであって真実は欧米の帝国主義・植民地主義に追随した侵略戦争であったとされ、極東国際軍事裁判(東京裁判)において断罪されました。そして、前述の通り、マッカーサー司令部(GHQ)は、日本が侵略国家・犯罪国家であったとして、「戦争罪責周知徹底計画」(ウォー・ギルト・インフォメーション・プログラム)を策定して、マスコミや学校教育を通じて日本全国に宣伝しました。それだけではなく、いわゆる日本の進歩的知識人たちが先を争って思想転向を行い、これまで礼賛してきた日本の国家主義を前面否定して、民主主義国家の建設を唱え始め、マッカーサーをさえ驚かせるような熱狂的、左翼的民主主義者が続出しました。著名な学者を列挙すれば、大内兵衛(おおう

ち・ひょうえ)、鶴見俊輔(つるみ・しゅんすけ)、丸山真男(まるやま・まさお)、横田喜三郎(よこた・きさぶろう)、安江良介(やすえ・りょうすけ)、久野収(くの・おさむ)、加藤周一(かとう・しゅういち)、竹内好(たけうち・よしみ)、向坂逸郎(さきさか・いつろう)、坂本義和(さかもと・よしかず)、大江健三郎(おおえ・けんざぶろう)、大塚久雄(おおつか・ひさお)といった面々です。

日本のキリスト教界の指導者である牧師や神父たちの大多数は知識階級に属しており、戦前から青年時代に一度はマルクシズム(社会主義・共産主義)の洗礼を受けています。マルクシズムとは唯物史観に基づいて、資本主義国家の打倒・階級の廃絶・プロレタリア独裁による共産主義社会を実現するために世界統一革命を行うことを必要とするという思想です。従って、敗戦後の日本では天皇制軍国主義を排して平和な社会主義国家として日本を再建することが望ましいと考える牧師たちが非常に多かったのです。そのため、賀川豊彦(牧師・社会主義者・労働組合運動推進者)の唱えた一億層総懺悔というスローガンが日本全国を風靡し、戦後初めて出現した社会党の片山内閣はキリスト教界全体から圧倒的な支持を受けました。こうした世情の中でキリスト教諸派の再編が行われました。

(1) プロテスタント諸教会の再編

しかし、日本キリスト教団自体は必ずしも上記のような考え方を統一見解とはしませんでした。教団統理の富田満(とみた・みつる)は、「終戦の詔勅に見る聖旨を奉戴し、国体を護持し、新日本の建設に努めよう」という指令を發しました。日本キリスト教団は、政府・軍部の言うところを限られた資料から判断して正義だと認めたから政府から要求されるままに教団内部の諸教会に伝達したのだと弁明しました。(ちなみに、日本キリスト教団が戦争責任を告白する声明を發表したのは前述の通り、20年後の1967年でありました。)

さて、戦時中日本政府の宗教統合政策によって信仰(教理、信条、礼拝)と職制の一致なしに合同した日本キリスト教団から戦後続々と諸教派が離脱して、それぞれの教団を再建し、教会形成を始めました。聖イエス会、インマヌエル総合伝道団、セブンスデイ・アドベンティスト教団、日本救世軍、日本キリスト改革派教会、東洋福音宣教会、きよめ教会、日本聖公会、日本福音ルーテル教会、日本バプテスト連盟、日本ナザレン教団、基督友会、日本福音基督教団、福音伝道団、日本ルーテル教団、アライアンス教団、アセンブリーズ・オブ・ゴッド教団、日本同盟基督教団、日本ホーリネス教団、そして、1951年旧日本基督教会の一部が離脱して、日本キリスト教会を再建し、こうして日本キリスト教団は、日本キリスト教会・日本メソジスト教会・日本組合教会の三者を主たる構成員とする合同教会を形成する道を進むことになりました。日本キリスト教団が解体されなかった理由を三つ挙げておきます。

戦時中の政府からの強制による合同を神の御旨と信じる人々がいたこと。

旧教派のあり方も日本キリスト教団の方が自由であると考えた人々がいたこと。

アメリカの8ミッション・ボード(八つの教派の外国宣教部)が教会合同の新しいケースとして日本キリスト教団の存在意義を認め、これを支持し、援助することを表明したので、経済的援助を期待して日本キリスト教団に残ることを選んだ人々がいたためです。

これらの理由に基づいて、日本キリスト教

団を教会たらしめようとする一致への努力が年々積み重ねられてきました。

日本キリスト教団憲法及び規則の制定と改正(1946年)

使徒信条を告白すること(1948年)

機構改革(民主化、中央機構の簡素化、教区の強化)(1950年)

信仰告白の制定(1954年)

しかし、この信仰告白には拘束力がなく、ただ、一致の目標として掲げられたものです。

以上のような経過を辿って再編された戦後のプロテスタント諸教会はそれぞれの特色を發揮して熱心な伝道を行った結果、戦前約20万人で信徒数が1953(昭和28)年23万7830人、1955(昭和30)年37万6357人、1985(昭和60)年61万1261人と3倍に増加しました。

(2) カトリック教会の発展

カトリック教会も占領軍からの積極的な支援を受けて活発な布教活動を行いました。外国人宣教師・修道女らの来日や復帰によって布教や教育事業、社会事業の面でも活発な活動が行われて教勢が拡大されて行きました。

戦前の日本キリスト教団合同時、プロテスタントが約20万人であった時にカトリック教会は約10万人でした。しかし、戦後は目ざましく増加して、1955(昭和30)年に20万人台となり、1963(昭和38)年に30万人台、1979(昭和54)年40万人台に達しました。1985(昭和60)年の日本キリスト教界全体の信徒数は105万9355人ですが、カトリックはほぼその半数を占めるに至りました。

このような発展の中において目覚ましいのはカトリック知識人の活動です。その中でも特に目立つのは、作家です。戦前はカトリック作家として知られる人は一人もいませんでしたが、戦後は多くのカトリック作家が登場して来ました。遠藤周作、三浦朱門、曾野綾子、矢代静一、高橋たか子、安岡章太郎、加賀乙彦、島尾敏雄、犬養道子などがいます。これらの作家たちは、その作品を通じてキリスト教の土着化を目指しているのですが、その内容については、「キリスト教の土着化」の章

で詳述したいと思います。この問題では作家だけでなく、神父の中でも有名な人々は井上洋治、門脇佳吉でしょう。

こうした日本人の神学者・神父・作家たちが沢山出てくるのに大きな力となったのは、1962年から1965年までに開かれた第二ヴァチカン公会議でした。この公会議は16世紀のプロテスタントの宗教改革に匹敵する20世紀のカトリックの宗教改革でありました。ヴァチカン公会議は16の公文書を公布しましたが、中でも「キリスト教以外の諸宗教に対する教会についての宣言」と「信徒使徒職教令」がなければ、日本における作家たちと神学者たちの目覚ましい活動は有り得なかったでしょう。公会議以前なら、彼らの多くは、「異端」として破門されていたでしょうから。

(3) ハリストス正教会の再建

ハリストス正教会は、1946(昭和21)年11月にモスクワのロシア正教会から主教が来日することになりましたけども、占領軍司令部(GHQ)の反対により実現せず、アメリカのギリシャ正教会と提携することになりました。このためロシア正教会系の主流派(ニコライ小野帰一主教)はニコライ系と訣別して、日本正統正教会を名乗りました。その後1954(昭和29)年正統正教会は日本ハリストス教会にもどり、教勢の発展に良い影響をもたらしました。ニコライ派は1969年(昭和44)年にモスクワとの関係を回復し、翌1970(昭和45)年4月10日に自治教会(アフトノモス)として正式認可され、全世界の独立正教会の一つとして認められました。又、同年東京に正教神学校が開設されました。その後の正教会の信徒数は不明ですが、教会は東京大主教区(21教会)、東日本主教教区(31教会)、西日本主教教区(16教会)があり、札幌から鹿児島に至るまで全国各地に広がっています。

5. 国家主義への回帰(1960年 - 2000年)

1950(昭和25)年の朝鮮戦争を契機として、日本に警察予備隊が創設されました。それが保安隊となり、1954(昭和29)年には、防衛庁が設置されて、保安隊は自衛隊と改称されるようになりまし。これら一連の再軍備への動

きは、1951(昭和26)年に日本国との講和条約を結んだアメリカが日本をアジア支配の協力的なパートナーに仕上げるための第一歩でありました。

1960(昭和35)年の日米安全保障条約(いわゆる安保)の締結は、東西両勢力の対決という世界情勢の変化の中で、日本が平和憲法に基づく中立の道を取ることなく、西側自由諸国の一員としてアメリカの傘下に属する強力な同盟国(従属国)となることを余儀なくされた決定的な出来事でした。日本国内には安保反対の一大デモンストレーションが左翼勢力を中心として全国的規模で起こりましたが、政府・自民党は衆参両院での強行採決によって、数の力でこの反対を押し切って法案を成立させ、警察機動隊を組織して反対勢力を弾圧しました。この時期から日本国の歩みは、戦後の国際化時代から国家主義への回帰の時代に移行して行くのです。

日本のキリスト教界は非武装中立を宣言した平和憲法を理想的なものキリストの教えにかなったものと信じて前向きに受け入れる人々が多かったのと、戦争中に国家の戦争に対する抵抗運動が不十分であったとの反省から安保反対の実践運動に参加することによってキリスト教信仰を証しようとする動きが活発になりました。

これより前、1949(昭和24)年日本キリスト教団の牧師・赤岩栄(あかいわ・さかえ)や東京神学大学の教授・井上良雄等を中心として「キリスト者平和の会」が結成され、キリスト教平和運動のさきがけとなりました。

しかし、赤岩栄が信仰はキリスト教、実践はマルクシズムという二元論を唱えて、自ら共産党入党を宣言した(これは実現には至らなかった)のに対して、井上良雄は、キリストは神の国において主であると同時にこの世においても主であるという一元論を主張してマルクシズムによらないキリスト教の社会的実践を唱えました。その結果、平和の会は二派に分裂し、赤岩栄の方は、彼が「キリスト教脱出記」を出版して後1966(昭和41)年に死去したので消滅しました。井上良雄をリーダーとする平和運動は日本キリスト教団の中に広がって安保反対闘争に大きな影響を及

ぼしました。

更に、1967(昭和42)年から自民党が靖国神社国営化法案を国会に上程する準備を始めたので、これも軍国化の一つであるとして全国的に反対運動が起こり、キリスト教界では日本キリスト教団、日本キリスト教会、日本キリスト改革派教会などが公に教団として靖国反対闘争に参加しました。この年に日本キリスト教団の戦争責任告白が発表されたのです。又、1970(昭和45)年には日本カトリック教会の中に「日本カトリック正義と平和協議会(正平協)」が結成されて、「社会に福音を証し、キリストによる平和と正義の建設のために働く」ことを宣言しました。

また、70年安保反対闘争は、1968(昭和43)年頃から全国各大学の学生(全学連・全共闘)を中心に活発化し、1969(昭和44)年は、最盛期となって東大や京大にも警察機動隊が入って、内戦さながらの攻防戦が行われました。それと同時に全国のキリスト教主義大学でも学園紛争が深刻化し、学園封鎖、機動隊の導入が続きました。関西学院大学、青山学院大学、関東学院大学等の各神学部が封鎖・廃止となり、1970(昭和45)年には東京神学大学に機動隊が入って過激派神学生が締め出されました。1971(昭和46)年の日本キリスト教団東京教区総会では万国博覧会にキリスト教館を建てることをめぐる議論の中で過激な社会派議員による暴力と流血事件が発生して長く総会が開かれない状態が続きました。このような社会派の動きに対して、日本キリスト教団内部に「正常化同盟」や「福音主義連合」結成が起こり(1977(昭和52)年)、社会派と福音派が対立、そして社会派優位の状態が長く続いて来ました。カトリック教会においても「正平協」という社会派の影響が強く、数においては少ないにもかかわらず、日本カトリック教会全体を代表するかと思われるような印象を教会内外に与えています。

それ以外の諸教会においては社会派と福音派というような対立は見られないようです。

さて、戦後の日本のキリスト教会の教勢を概観すると、初期の国際化時代には熱心な福音宣教が行われ、多くの人々が救われて教勢は急速に進展しました。しかし、1960年以

降の反安保闘争、反体制運動、平和運動、原水爆禁止運動といった左翼的な政治活動に熱心な教団・教会は、霊的にどんどん弱体化しました。霊魂の救いを求めて教会に来る人たちは、国家批判、反安保、反米、その他の社会問題、政治問題ばかり聞かされるとウンザリして来なくなるし、それまで教会につながっていた人たちも、政治的立場が違っていると離れて行くのです。牧師や神父などの聖職者や教会が一定の政治的立場を鮮明にして社会実践を行うことは教会の本質的使命である福音宣教と霊魂の救い、キリストの体としての教会形成を妨げる結果となります。政治的、社会的諸問題は、教会の中ではとりなしの祈りの課題として取り上げる程度にとどめ、社会的実践は信徒個人に委ねる方が良いのではないかと思います。

実は、私も1949(昭和24)年から「キリスト者平和の会」に入り、1966(昭和41)年まで積極的な平和運動を展開してきましたが、1966(昭和41)年に圧倒的な聖霊の満たしを受けて主イエス・キリストとの合一を経験した時から平和運動よりも人々の霊魂の救いを主が熱心に求めておいでになることが分かりました。知的に理解する以前に、私を通して主イエス様がアリアリと現臨して人々を救われるので、牧会伝道の方が多忙になって、社会運動はしていられなくなったのです。又、聖霊は私を聖霊カリスマ刷新運動の中へと導き入れて下さいました。その結果、カトリック教会・ペンテコステ教会・その他の諸教会の聖職者や信徒たちとの主に在る一致と協力の道が開かれました。更に、1976(昭和51)年に超教派の「日本のためのとりなしの会」を設立して全国的な「とりなしの祈」運動を拡大して今日まで継続しています。このとりなしの祈の課題の一つとして、「天皇陛下と皇室のための祈」を初めから取り上げましたが、天皇を首とした日本国家の体質と伝統について研究を進めて来るうちに、天皇制廃止という思想は修正され、日本国の伝統を重んずることが主の御旨であると考えようになりました。一つのイデオロギー(政治的観念)に囚われるとなかなかその中から出られないのが人間の弱さでしょう。ただ聖霊の恵みの

力によってのみ解放されるのだと思います。

国家主義への回帰はまだ続くでしょう。それどころか1995(平成7)年、つまり戦後50年目のこの年から更に加速しつつあります。日本国民は米国の核の傘の下で守られているという幻想からやっと醒めてきたようであり、自分の国は自分で守らなければ独立国家とは言えないことにもやっと気付いて来たようです。そのために日本国家の伝統を見直すことは日本人のクリスチャンとして当然のことではないでしょうか。

6. 超教派大衆伝道の展開

戦後から今日に至るまでの58年間、日本のプロテスタント教会は様々な形での超教派大衆伝道を展開して来ました。今、それらを列挙してみますと、

(1) 新日本建設運動

これは賀川豊彦によるもので、賀川は1946(昭和21)年から1949(昭和24)年にかけて3年半にわたり全国各地を旅行してデンマーク国の戦後復興を例にとり、新日本建設はキリストの贖罪愛を信じてはじめて成功することができるかと講演しました。

(2) スタンレー・ジョーンズ伝道

1949年から世界的大衆伝道者スタンレー・ジョーンズが来日して全国各地を巡回して伝道しました。

(3) ラクーア音楽伝道

1950(昭和25)年には、ラクーア音楽伝道団が来日して、日本各地で音楽伝道を行った結果、諸教会に多大な影響を与え、1952(昭和27)年に「ラクーア伝道記念日本音楽伝道団」が結成されました。

(4) 原始福音運動

原始福音運動は無教会主義キリスト者手島郁郎(てしま・いくろう)(1910年生~1973年帰天)が1948(昭和23)年九州の阿蘇山中で熱烈に祈り求めた結果、生けるキリストに出会い、聖霊の充満とカリスマによって一新された経験に基づいて始められました。

1948(昭和23)年から信仰雑誌「生命の光」を発行し、全国各地で大聖会を開催しました。特色のあるのは、1959(昭和34)年に天台仏教の比叡山で超教派の大聖会を開いたのを

初めとして、神道の伊勢神宮、禅宗の大雄山、真言宗の高野山、日蓮宗の身延山などで毎回2千名~3千名の参加者がありました。「生命の光」誌購読者は全国で2万5千名におよび、会堂を建てず、幕屋(まくや)という支局、支部は借家で国内116、海外8を数えました。初めは超教派の運動でしたが、次第に独自のグループ「神の幕屋」を形成し、イスラエルとの親交を深めました。創始者手島郁郎の帰天(1973年)後は手島千代夫人を中心に伝道者たちが手島のヴィジョンを受け継いでいます。出版社ミルトス(社長:河合一充)が日本とイスラエルを結ぶ架け橋として優れた書籍を出してきました。

(5) 聖霊カリスマ刷新運動

カリスマ運動の源流は、1900年にアメリカで始まったペンテコステ運動でした。それは異言を伴う聖霊のバプテスマを強調する信仰によるもので、ペンテコステ派教会という大きな流れに成長し、カトリック、プロテスタントと並ぶ第三の流れをアメリカ、ヨーロッパ、そして南米へと発展させました。しかし、1960年にアメリカで始まった聖霊カリスマ刷新運動は既成の伝統的なカトリック、プロテスタントの中に起こり、各教会の信仰を聖霊によって刷新することにより、教派を超えたキリストに在るクリスチャンの一致をもたらすものでした。

1970(昭和45)年にカナダのレスター・ブリチャードがチームを率いて来日し、1972年の東京聖会ではプロテスタント(吉山宏)、カトリック(ディモンティニー)を中心に発展し、1977(昭和52)年に両者は二つの流れとして別々に成長するようになりました。又、カリスマ聖会の他に東京福音クルセードが開催され、韓国ソウルの趙鏞基(チョー・ヨンギ)が講師として1979(昭和54)年まで、東京、横浜、名古屋、大阪等でカリスマ的伝道聖会を行いました。

(6) FGBMFI ジャパン(国際純福音事業家親交会・日本)

これはアメリカでデモス・シャカリアンによって創始された事業家による事業家のためのカリスマ的伝道で、カリスマ運動と共に日本に入って来ました。

(7) 全日本リバイバルミッション

これは1970(昭和45)年に滝本明、田中政男が愛知県新城市のイエス福音教団新城教会から旗揚げしたもので、全日本のリバイバルを目指して発展してきた超教派の働きです。1998(平成10)9月には東京武道館で10日間に亘る聖会を開催、その後甲子園その他全国各地でリバイバル聖会を行いました。

以上のような超教派大衆伝道が炎のように日本列島をかけめぐりましたが、大衆伝道の結果、各教会の信徒が著しく増加し、定着し、教会成長に役立ったという効果は全体として見られないようです。むしろ、各個の教会の日常的な伝道の働きが少しずつ実を結んできたのではないかと考えられます。

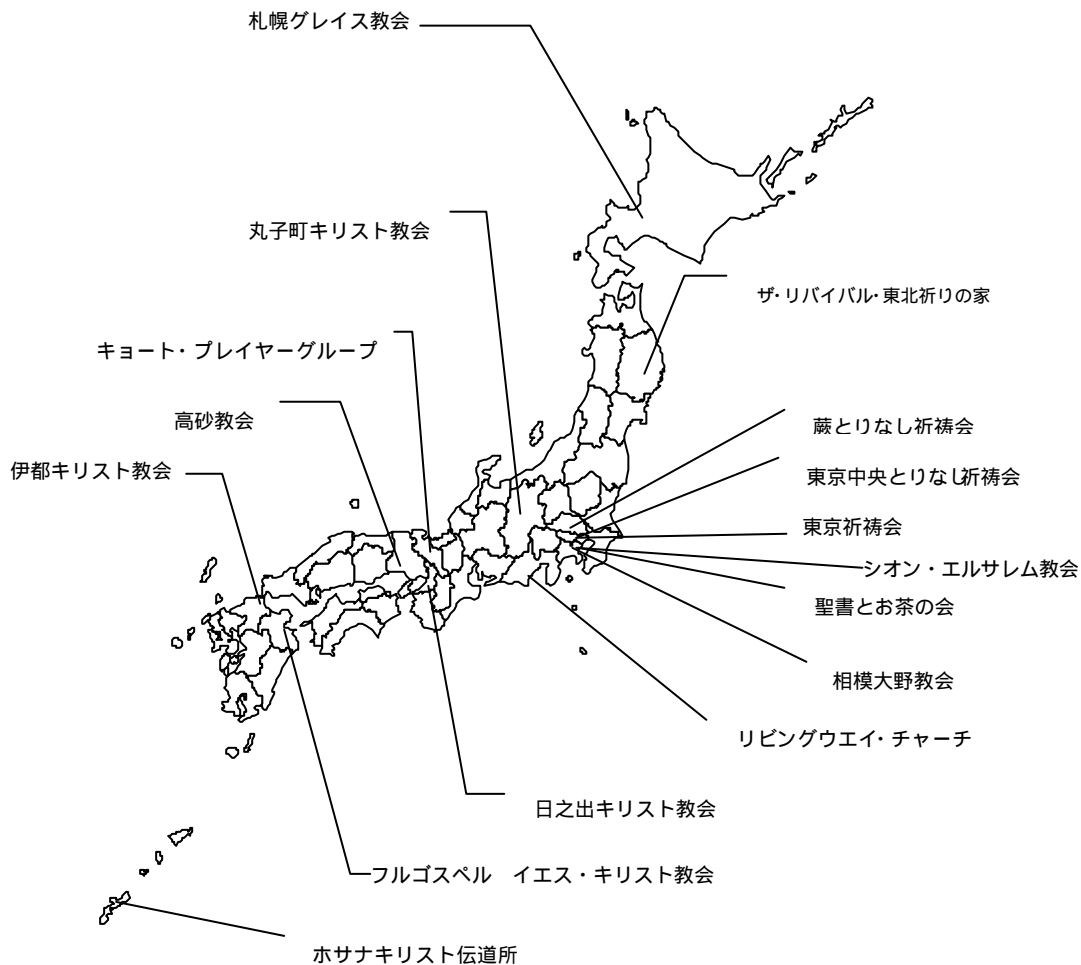
7. 日本キリスト教教会人口の推移

信徒(聖職者を含む)数、日本の人口比(%)

1948年	331,087	0.423
1960年	655,155	0.707
1970年	818,833	0.799
1980年	903,755	0.778
1990年	1,003,418	0.814
2000年	1,094,706	0.860
2004年	1,132,344	0.887

従って、日本のクリスチャン人口は日本国民の総人口1億2千7百万人のうち未だ1%に及ばないことが明らかです。(「キリスト教年間」教勢一覧表参照)

(以下、次号に続く)



地域別とりなし祈禱会

1. 北海道

札幌市 : キリスト公会 札幌グレイス教会 皆川尚一牧師
〒001-0032

札幌市北区北 32 条西 5-3-27

TEL 011-717-1801

毎月第 2、第 4 日曜日午後 2 時

2. 岩手県

水沢市 : ザ・リバイバル・東北祈りの家 高橋範明

〒023-0813 水沢市中町 26 レストラン・プレイズ

TEL 0134-62-3561

毎月第 3 日曜日 午前 7 時 00 分

3. 埼玉県

蕨市 : 蕨とりなし祈禱会 鷺谷世嗣兄

〒335-0003 蕨市南町 3-3-12

TEL0484-42-0967

毎月祝祭日午後 2 時

4. 東京都

東京都内 : 東京中央とりなし祈禱会 皆川尚一牧師

* 会場 早稲田奉仕園セミナーハウス(東京都新宿区西早稲田 2-3-1)

* 連絡先 〒228-0802 神奈川県相模原市上鶴間 6-1-17 皆川尚一牧師

TEL042-747-5703、FAX042-746-2119 毎月第 4 月曜日午後 6 時 30 分 ~ 9 時

東京祈禱会 山浦もと姉

* 会場 キリスト教婦人矯風会館 B - 1(新宿区百人町 2-23-5)

* 連絡先 〒350-0812 埼玉県川越市下小坂 612 主の園 3-25 山浦もと姉

TEL0492-34-7049,FAX0429-31-5552 毎月第 1 月曜日午後 1 時 30 分

5. 神奈川県

横浜市 : シオン・エルサレム教会 平瀬戸恵理牧師

〒220-0044 横浜市西区紅葉が丘 6-2

TEL & FAX 045-243-9135

email: a_motherofnations_sarah@jp-t.ne.jp

毎月第 2or 第 3 水曜日午後 1 時 30 分 ~ 3 時 30 分

聖書とお茶の会 吉田久子姉

〒241-0836 横浜市旭区万騎が原 8-9 吉田方

TEL 045-363-5657

毎週金曜日午後 2 時

相模原市 : キリスト公会相模大野教会 皆川尚一牧師

〒228-0802 相模原市上鶴間 6-1-17

TEL 042-747-5726,747-5703 FAX 746-2119

URL <http://www.Christ-ch.or.jp/>

毎月第 2 木曜日午前 10 時 15 分

6. 長野県

小県郡 : 丸子町キリスト教会 松吉理枝子牧師
〒386-0404 長野県小県郡丸子町上丸子川原 1710 - 1
TEL 02684-2-5264 毎週水曜日午後7時30分

7. 静岡県

静岡市 : リビングウェイ・チャーチ リッキー・ゴードン師
〒420-0841 静岡市上足洗4丁目6-16-7
TEL 054-248-4058 毎月第1日曜日午後2時

8. 京都府

京都市 : キョート・プレイヤーグループ シスター・ローズマリー・バス
〒604-8006 京都市中京区河原町三条上ル カトリック会館3F
TEL 075-781-3330 毎週火曜日午後7時 英語の祈祷会

9. 大阪府

寝屋川市:日の出キリスト教会 滝本千歳牧師
〒572-0835 寝屋川市中木田町26-9
TEL&FAX0720-22-9232 毎月第3木曜日午後2時

9. 兵庫県

高砂市 : 日本キリスト教団 高砂教会 手束正昭牧師
〒676-0015 高砂市荒井町紙町1-34
TEL 0794-42-4854 FAX 42-4878 毎月第4水曜日午後9時30分~12時

10. 福岡県

福岡市内:伊都キリスト教会 友納徳治牧師
〒819-0167 福岡市西区今宿井尻12-4-1
TEL 092-807-9080、FAX 807-2298 毎月第3水曜日7時30分

11. 大分県

別府市:フルゴスペル イエスキリスト教会 永野誠治牧師
〒874-0933 別府市野口元町10-1
TEL & FAX 0977-26-3692
e-mail:fg.jesus@poppy.ocn.ne.jp
毎週金曜日午後7時30分

12. 沖縄県

那覇市 : ホサナキリスト伝道所 喜瀬慎秀牧師
〒900-0031 那覇市若狭2丁目9-5 毎週土曜日午後6時
TEL 098 - 868 - 5641

2003年12月号祈りの焦点

(1) 継続的課題

1) 公明党が連立政権から外され、政界におけるその勢力が著しく減退するように。

又、自民党が見識を取り戻して創価学会に頼らなくなるように祈りましょう。

〔解説〕

* 公明党が野心をむき出しにしたのは、第二次森内閣の時からです。それは生粋の党エリート坂口力（ちから）氏を厚生労働大臣に就任させ、小泉内閣でも坂口氏は二回にわたって再任されました。この三年間に坂口氏＝公明党は厚労省をすっかり取り込むことに成功していました。坂口氏は去る9月に年金改革の試案を発表しましたが、その内容は保険料を値上げし、受領額を引き下げるものでした。しかし、担当大臣が個人的な改革案を政府内の議論を経ないで発表するのは極めて異例のことです。一步間違えば内閣に不一致を招き、内閣が大混乱に陥る危険性があります。奇妙なことに、それでも小泉首相をはじめ内閣のだれからも批判が出ないばかりか、坂口試案は総選挙で《年金100年安心プラン》という公明党のマニフェストになったのです。（週刊ポスト12月12日号42ページ参照）。又、創価学会の幹部は「学会の教えは、地球民族主義で国家という概念はない。教育基本法の復古主義的な改正は思想統制が強まり、学会の活動がやりにくくなる。国を愛する心なんて絶対に認められない」と述べています（国民新聞7月13日記事）

2) カルト集団からの脱会者がキリスト教会に来て救われるように。

〔解説〕

* カルト集団の信者や同調者が受けたマインド・コントロールから彼らが解放されるためには、キリスト教会の方の忍耐強い行き届いた配慮や指導が必要だと思います。統一教会、エホバの証人、モルモン教、創価学会その他のグループの実態を良く研究して、キリスト教との接点を見出すこと、彼らの背後にある国際的な組織と金の流れも知る必要があるでしょう。

3) 天皇陛下が主イエス・キリストに在って救われ、大いに祝福され、その祝福が遍く日本国民の上に及びますように。また、天皇陛下が世界の諸国民の中であって、祝福の基として用いられますように。そして、国民が天皇陛下を先達として理解し、尊敬して、国際平和のためにつくすように祈りましょう。

〔解説〕

* 58回目の終戦記念日を迎えた今年の8月15日、政府主催の全国戦没者追悼式が東京の日本武道館で開かれました。戦没者の遺族約5千人、小泉首相を始めとする各界代表者ら1200人が参列して、戦没者約300万人の冥福を祈りました。天皇・皇后両陛下の御臨幸があり、お言葉を賜りました。以下の通りです。

「本日戦没者を追悼し、平和を祈念する日に当たり、全国戦没者追悼式に臨み、先の大戦において、かけがえのない命を失った数多くの人々とその遺族を思い、深い悲しみを新たに致します。

終戦以来既に58年、国民のたゆみない努力により、今日の我国の平和と繁栄が築き上げられましたが、苦難に満ちた往時を偲ぶ時、感慨は今なお尽きることがありません。

ここに歴史を顧み、戦争の惨禍が再び繰り返されないことを切に願い、全国民と共に戦陣に散り惨禍に倒れた人々に対し、心から追悼の意を表し、世界の平和と我国の一層の発展を祈ります。」

4) 互いに批判し合い、反目し合ってきたキリスト教会とユダヤ人、カトリック、プロテスタン

ト、そしてペンテコステ、および各教派・各教会の間に、悔い改めと和解が起るように。

〔解説〕

* 私たちは、考え方ややり方の違う個人や団体と付き合う場合、違いを強調して対立することを止め、一致点を強調し、互いの長所を認めることによって悔い改めと和解に至るのではないのでしょうか。未だ救われていない人々の救いを共に祈ることによりアルゼンチンではキリスト教各派が一致協力するに至ったという実例があります。

5) キリスト教の文書伝道が進展するように祈りましょう。

〔解説〕

キリスト教関係の新聞社

キリスト新聞、クリスチャン新聞、リバイバル新聞

キリスト教系の出版社

新教出版社、教文館、日本キリスト教団出版局、レムナント社、マルコーシュミッション、生ける水の川、みるとす社等

6) TV・ラジオ・新聞・雑誌関係者たちがおごりと偏った報道や人権無視の取材を止め、神を畏れたフェアな在り方をするように。これらに気付いた人が抗議や訂正の声をあげ、日本の見張り人の役を果たすように祈りましょう。

〔解説〕

* 日本テレビが10月13日「新ニッポン見聞録・悪質工事の巧妙手口」という番組を流しましたが、その陰に「連帯ユニオン関西生コン支部」という極左過激派が働いています。

* 毎日テレビが10月30日「VOICE」というニュース番組を放映した中に、塚本幼稚園という私立幼稚園が運動会で戦時歌謡を歌ったことを「幼稚園児に愛国心。運動会に日の丸行進曲」とのタイトルをつけました。

* TBSテレビが11月2日の「サンデーモーニング」で、「北朝鮮による拉致問題の解決をはかる東京集会」で発言した石原慎太郎都知事の「日韓併合を100%正当化するつもりはないが」を「100%正当化するつもりだ」に改変して放映しました。

(以上、国民新聞 平成15年11月25日号記事より)

7) 日本に亡国の危機をもたらす少子化傾向がくい止められ、神の御心にかなった増子化対策が社会全体の祝福によって実施されるように祈りましょう。

「神は彼らを祝福して言われた、《生めよ、ふえよ、地に満ちよ、地を従わせよ》」(創世記1:28)。

〔解説〕

* 今年の7月に日本国の少子化対策の根幹と位置付けられる二つの法律が成立しました。

「少子化社会対策基本法」と「次世代育成支援対策推進法」です。

の基本法には国や事業主や国民の債務、保育サービス、経済的負担の軽減が盛り込まれると共に「子供を持たない人や婚外子などがいかなる差別をも受けないように十分配慮すること」が明記されました。の「推進法」には自治体や事業主に具体策を立てるように求めています。(「日本の論点2004」p.492-493)

(2) 時宜的(タイムリーな)課題

1) 小泉内閣が神を畏れ、日本の進路を誤ることなく、日本国の独立性を確保すると同時に、国際平和に貢献できるような政治を行うように祈りましょう。

〔解説〕

* 小泉首相と自民党森派の創価学会取り込み工作は11月9日の衆議院議員総選挙で成功し、森

派は10議席を伸ばしました。自民党候補者たちの中で公明党の推薦を受けたものは当選し、受けなかった者は落選しました。結局、自公連立政権が生まれ、公明党に主導権を握られることになりました。

*日本の国政を担うに足る真の政治家が起こされるように祈りましょう。

2)日本国民全体の中にキリストの福音が広く深く受け入れられて行くように祈りましょう。

〔解説〕

*リバイバル・ミッション、日本キリスト伝道会、1000万救霊運動、日本民族総福音化運動、聖霊カリスマ刷新運動が用いられますように。

*福音が家族・家系を通じて子々孫々に受け継がれて行くために、具体的な方法を実践して行く必要があると思われます。

*遠い古代から日本人の中に播かれ、受け継がれて来た福音の種(たね)を芽吹かせるために。

3)北朝鮮による拉致問題の解決があくまでも外交上の最優先課題とされ、拉致被害者の家族が日本に帰って来るように。又、北朝鮮の核準備が取り除かれるように。

〔解説〕

*国民新聞：平成14年7月号によれば、創価学会のメインバンクである東京三菱銀行には学会の特別口座があり、資金量は1兆円を下らないということです。

*新潮社のホームページ2003年12月4日のニュースによれば、「創価学会に援助を求めた北朝鮮の窮状」というタイトルで食糧危機にあえぐ北朝鮮が日本国内の友好団体を通じて創価学会に交流を求めて来ているということです。

*週刊ポスト2003年11月7日号によれば、北朝鮮から韓国に亡命した黄長華氏が金正日独裁体制を崩壊させる方法として、日本か、米国に、「臨時革命政府」を作ることを考えていると報道写真家の山本皓一氏に語ったということです。

*又、黄長華氏は、10月31日、米議会内で講演し、中国が北朝鮮との関係を断絶することを要請し、かつ中国や日米両国等諸外国の圧力で金正日体制を速やかに崩壊させるよう目指すべきだとしました。また、日韓両国が米軍とは別に北朝鮮の独裁者との関係正常化を求めるのは愚かな行為だと述べました。(国民新聞11月25日号)

*北朝鮮による法人拉致被害者の救出に向けて、「救う会東京」(会長：田代ひろし都議)は10月28日、池袋の東京芸術劇場で、「同朋を奪還するぞ！ 全都決起集会」を開きました。そこで、拉致解決のためただちに経済制裁を加えるよう政府に要求する決議を採択しました。(国民新聞11月25日号)

4)日本における教育が健全な方向に導かれるように。

〔解説〕

*地方議会を中心にジェンダー・フリー思想に反対する動きが強まっています。7月、鹿児島県議会が県内の幼稚園や小中学校でジェンダー・フリーの教育を行わないように求める陳情を採択しました。これに続いて石川県議会も10月8日に「男女共同参画推進条例の適用は社会の制度や慣行を尊重し、慎重に行う」ことを決議しました。

5)悪法「裁判員制度」が導入されないように祈りましょう。

〔解説〕

*一般国民の中から「くじ引き」選ばれた「素人」(しろうと)を刑事事件の審理や裁判に参加させる「裁判員制度」が来年の通常国会に法案として提出される見通しです。現在、「司法制度改革推進本部」が立法化を準備中なので提出されないように先ずお祈り下さい。

6)日本が日本独自の外交・防衛のビジョンを持つことが出来るように祈りましょう。

〔解説〕

*日本が台湾との同盟関係を視野に入れたアジアにおける協力関係を求めて行くように。
*産経新聞9月28日号の記事によれば、再訪日を検討していた台湾の李登輝前総統はこのほど、訪問を断念したことを受け入れ側に伝えてきました。それは盛岡市出身の教育家新渡戸稲造の没後70年式典が10月18日に行われるので、同市内の新渡戸稲造顕彰会から講演の要請を受けていたのですが、日本国外務省がビザ(査証)を発給しないためとの事です。

7)「日本が、過度にアメリカ型に傾斜してしまった経済システムのあり方を見直して、日本の個性、使命、賜物を生かし、未来を展望できるような資本主義経済のあり方を見出していくことができるように。そのために、特に、経済界の指導者たちがクリスチャンとなって、神が日本の国に抱いておられる将来と希望、そして固有の賜物につき、発見と洞察が与えられますように。ビジネスマン伝道が特に祝福されるように。」

〔解説〕

*文藝春秋2004年1月臨時増刊号は、「蘇れ! メイド・イン・ジャパン」の特集を組んでいます。箇条書きに列挙すると:

「パイオニア」会社の危機を救え! プラズマ「8人の侍」(プラズマテレビ)

「樹研工業」100万分の1グラム 世界最小の歯車

「海洋堂」1億数千万個を売り上げるおまけフィギア世界を制す

「マツダ」米国人重役を説得。「RX-8」の奇跡の復活劇

「日立製作所」ミューチップ0.4ミリの粉が偽造を見破る

「キャノン」デジタルカメラの鍵は「記憶色」にあり

「並木精密宝石」海軍電波兵器から世界一の「パーツ屋」に

「シャープ」韓国・台湾を駆逐する門外不出の液晶技術

「ファナック」知能化ロボット

「池内タオル」中国に蹂躪されたタオル業界の起死回生策

「JAHDS」地雷探知機で「日本オールスターズ」結成

「味の素」長老支配を打破。アミノ酸を武器に世界へ

その他、注目すべき充実したレポートを満載しています。

8)旧日本軍毒ガス放置問題に対して日本政府が公正な立場を厳守するように。

〔解説〕

*旧日本軍が中国東北地方(旧満州)に放置した毒ガス弾や砲弾で死亡したり、後遺症などの被害を受けた中国人の被害者や遺族13人が日本政府に2億円の損害賠償請求を求めた訴訟の判決が9月29日東京地裁でありました。片山良広裁判長は「国は調査や回収を中国政府に申し出ることが可能で、被害防止のための措置を委ねる作為義務を怠った」として、原告側の訴えを全面的に認め、国に1億9千万円の支払いを命じました。

今回の裁判の奇妙な点は、同じ訴訟に対する別の判決が本年5月にすでに出ている事です。5月の東京地裁の判決は、「毒ガスの遺棄・放置は違法」としながらも「調査や回収は著しく困難だった」として、請求を斥ける判決を言い渡しているのです。日中間の戦争賠償の請求放棄の条約があるのに、今回の片山裁判長の判断によれば、日本国への賠償請求は無際限になるでしょう。

9)米軍が劣化ウラン弾の使用をやめるように

〔解説〕

- * 週刊文春 2003年7月24日号の記事によれば、かつて湾岸戦争のとき米軍がイラクにばら撒いた劣化ウラン弾は総量320トンで、放射能原子の量は広島に落とされた原爆の一万倍以上といわれます。今回のイラク侵略では500トン使用されたと言われます。日本政府はひたかくしにしていますが慶応大学の藤田裕幸助教授や徳島県立海部病院の井下俊（いのしたとし）医師がイラクを訪れて調査した結果、大量のウラン弾が使われたことは間違いなく、小児癌や白血病が急増していることがわかりました。劣化ウランは燃えると5ミクロン以下の微粒子となって数十キロの範囲に飛散し、空気とともに肺に入り込むだけでなく、野菜、家畜、地下水にも浸透します。胎児の奇形にも影響するのです。
- * イラクだけではありません。沖縄の米軍が軍事演習で秘密のうちに劣化ウラン弾を使用していたことが過去の事例で明らかになったことがありました。日本政府はこのような劣化ウラン弾の使用禁止を米軍に求める必要があると思います。

10)イスラエルの平和のために祈りましょう。

「見よ、イスラエルを守る者は、まどろむこともなく、眠ることもない」（詩篇121:4）

〔解説〕

- * 神様のご介入によってイスラエルとアラブとの間に平和が生まれるように。
- * パレスチナ人国家を創設するというオスロ合意自体が無理な政治的解決策だったのです。なぜなら、パレスチナ人というものはなく、この土地に住んでいたアラブ人を英国が勝手にそう呼んだに過ぎません。アラブ人がイスラエル共和国の存在を公式に認めることからすべての正常化の道が始まるといえるでしょう。

* 《会計報告》(2003年8月1日~2003年9月30日)

(単位 = 円)

収 入	金 額	支 出	金 額
献 金	118,000	交 通 費	0
		印 刷 費	2,619
		資 料 費	33,385
		郵 送 費	40,400
		事 務 費	0
		振替手数料	890
		電 話 料	10,186
小 計	118,000	小 計	87,480
前月繰越	109,870	翌月繰越	140,390
国内活動基金 収入	0	国内活動基金 支出	0
前月繰越金	15,700	翌月繰越金	15,700
国際会議参加基金 収入	0	国際会議参加基金 支出	0
前月繰越金	35,474	翌月繰越金	35,474
合 計	279,044	合 計	279,044

【献金者芳名】(順不同)

高砂教会(兵庫)	2回	長谷川乃武男(東京)	1回
相模大野教会(神奈川)	2回	大村哲夫(東京)	1回
札幌グレイス教会(北海道)	2回	佐藤節代(神奈川)	1回
日之出キリスト教会(大阪)	1回	上石恭子(東京)	1回
池袋キリスト教会(東京)	1回	高橋美子(茨城)	1回
キリスト福音大分教会(大分)	1回	太田泰道(愛知)	1回
林 実(栃木)	1回	出田秀信(熊本)	1回
中路登志弘(埼玉)	1回		

【編集後記】

- * 2003年12月号のニュースレターをお送りします。
- * トップレポート「日本宣教論序説」(第9回)で一応「本論」は終えることにしました。次号で「結論」を述べる予定です。
- * 祈祷課題4)の各教派、各教会の間の和解と一致が不可能に近い問題だということを近頃、痛感しています。
- * 聖霊を受けているはずの人々でさえ、許容

範囲が狭いことを自己義認して、自分と異なる考えを排斥しようとするのを見ます。

- * 日本の全キリスト教会を一新するための新しい聖霊の炎が降ることを祈りましょう。
- * 「不義なる者はさらに不義を行い、聖なる者はさらに聖なることを行うままにさせよ」(ヨハネ黙示録22:11)

(ヨハネ 皆川尚一記)

《次回日本のとりなし委員会予告》

日時：2003年2月2日(月)12時
場所：キリスト公会 相模大野教会

